文献利用指導における問題点

Some Problems in Bibliographic Instruction

東京大学教育学部

長 沢 雅 男*

Abstract: There are several current and positive trends in academic library education. The author maintains that bibliographic instruction as well as library orientation should be part of the library education and complement each other. But bibliographic instruction has not yet been well-established in Japanese Universities. The author summarizes a bibliographic instruction course in a university and compares these findings with a similar course in other academic settings, seeking suggestions for the improvement of bibliographic instruction. The article ends with some comments on the problems concerning the bibliographic instruction course.

I. はじめに

図書館利用教育の一方法である文献利用指導について近年大いに関心が高まってきている。それは、図書館の蔵書が増え、個々の資料ならびに検索ツールが多様化していくにつれて、従来、だれにでも自由に使えると思われていた図書館の使いづらさが顕在化してきたことの反映であろう。同時に、大学教育の大衆化傾向に伴い、初歩的な図書館利用の方法さえ知らない学生が急増していることも図書館員の問題意識をかきたてる原因となっているであろう。

筆者自身、これまで二つの大学で文献利用指導と関係の深い科目を担当し、この種の科目の必要性を痛感するとともに、多くの問題が含まれていることに気付いたので、正規の科目における経験をふまえ、与えられたテーマについて検討することにした。

II. 背景

大学図書館の利用教育を考える場合、当然のことながら、大学の教育ならびに研究との関係を考慮しなければ

ならない。周知のごとく、わが国の大学教育制度は、第二次大戦後アメリカのそれから多くを見習ってきたが、実質的には中途半端な制度上の改革にとどまり、新制度に即応した具体的な措置が十分講じられていない。図書館もこうした例に漏れるものではない。

「図書館は大学の心臓である」とはよく耳にすることではあるが、その具体的裏付けは不十分であり、その利用の効率を図るために大学として教育の問題をどのようにとりあげるのか、図書館側以外から積極的な発言はほとんどなされていないといつてよい。そこに大学図書館が抱えている諸問題の根源があるといってもさしつかえない。

一般に、図書館利用教育を行うには、学生、教員、図書館員の間の連携協力が前提とならなければならないが大学生は図書館からどれだけの情報が得られるのかを知らなくても、何となく図書館を使えていると思っているために、改めて利用教育を受ける必要をさほど感じてはいない。

教員側からも、大学の段階で果たして図書館利用教育が必要なのか、大学生ともなれば、図書館の使い方は当然知っているはずといわんばかりの疑問がしばしば提出される。多くの学生利用者と接している図書館員ならばこうした疑問にも実情を示してその必要性を主張するこ

* Masao NAGASAWA: Associate Professor, Faculty of Education, Tokyo University.

(昭和54年11月20受理)

とは容易であるが、両者の意見の交流、さらに解決策の検討ならびに具体的な提案はまったくなされていないといってもよい。

こうした観点から、アメリカの図書館員たちの利用教育への取り組みの跡をたどることは大いに示唆的であると考えられる。論文の面から、それを展望するならば、1950年までの段階でも、もちろん図書館利用に関する論文は少なからず発表されていたが、学生の利用教育を正規のクラスで行うことが主たる関心ではなかったといつてよい。レファレンス・サービスの一環として、個別的に参考質問のかたちで出される要求に応じて利用指導をする場合が多かったからであろう。

しかし、60年代の終わりには、「なぜ利用教育を行うべきか」をテーマにした論文は、「いかに利用教育を行うべきか」をテーマにした論文に主位の座を譲っている。しかも、単に学部学生の利用教育にとどまらず、大学院レベルの研究手段としての文献利用指導の問題を扱ったものが目立つようになっていく。また、正規の教育を超えて、利用者が生涯教育の一環として情報収集・利用の技術を身につける必要を説くものも多くなっている。

こうした背景には、大学図書館関係者ならびに諸団体の利用指導計画への積極的な取り組みがあった。大学・研究図書館協会 (ACRL) は、この問題の調査、研究助成、図書館の参画を促進するために、1971年に文献利用指導研究部会 (Bibliographic Instruction Task Force) を新設した。当初この部会は大学図書館における文献利用指導の調査を目的としていたが、その結果は、同部会の長である Thomas Kirk によって報告されているように、将来の利用教育計画の基盤を形成するものであった。

すなわち、引続き文献利用指導の指針の作成に努力が傾注され、1975年にまず原案がまとめられ¹⁾、これが若干の修正を経て、1977年1月末に理事会で承認され、広く公表されることになったのである²⁾。なお、同部会は ACRL 内に文献利用指導部 (Bibliographic Instruction Section) を設立することも勧告し、その結果、1977年に新しい部門が設けられることになった。

因みに、他の図書館員グループも100名以上の署名を集め、アメリカ図書館協会内に図書館利用教育委員会を設けるよう要求し、これが1977年の冬期総会で承認されている。もちろん、これにはあらゆる館種の図書館が参加するが、利用教育は学校図書館から大学図書館までを通じて一貫して継続的に実施すべきものとするならば

大学図書館にとっても極めて深いかかわりがあるといえよう。

このほか、利用指導活動として見逃せないのは、大学図書館関係者による一連の研究集会が開催されてきたという事実である。すなわち、1971年に、第1回の学術図書館の利用指導に関する年次研究集会が Eastern Michigan 大学で開催されている。以来、多くの参加希望者の中から毎年100名を選んで研究大会を開催し、各年のテーマのもとに討議を積み重ねてきている。

この議事要録は、『図書館オリエンテーション』、『学術図書館の挑戦——いかにして学生の利用指導を動機づけるか』、『図書館のオリエンテーション計画の策定と開発』、『図書館利用指導の評価』、『学術図書館利用指導』、『図書館利用指導における教員の関与』、『70年代の図書館利用指導』といった書名のもとに、ほぼ毎年公刊されている³⁾。この波及効果はかなり大きいと思われる。

この研究集会を主催してきた Eastern Michigan 大学の Center of Educational Resources の所長 Fred Blum は、過去7年間に行われた集会を回顧し、そこに変化の跡が伺えるとして、次のように述べている。

初期の段階では、図書館のオリエンテーションという考え方において、〈手を差しのべること〉が主要な役割であり、この当時はオリエンテーションは組織立ったものではなく、幾分非公式な性格のものであった。ところが、70年代も後半になると、利用指導は図書館が提供し、図書館員が担当して、履修単位を与える組織立った正規のプログラムとなる傾向にある⁴⁾。

また、この第1回集会の成果として、財団の支援を得て、1972年に LOEX が設置されることになった。これは Library Orientation Exchange の頭字語を名称とする機関であるが、オリエンテーション・プログラムをもっている図書館相互の間の情報交換に資するために作られたものである。ここにいうオリエンテーションには、広く利用指導が含まれるが⁵⁾、LOEX では既成の利用指導プログラムを収集し、新たにプログラムの作成開発を意図している図書館に提供し、図書館員の利用指導への取り組みを促すことを目的としている。

こうした近年におけるアメリカの動向と照らし合せてわが国の大学図書館の利用指導の現状を展望すると、多くの問題の所在が明らかになる。

もちろん、ひとくちにアメリカの大学図書館といって

も、伝統、規模その他のさまざまな条件のもとで、個別に行われている利用指導のあり方は一様ではない。しかし、既述の指針にもみられるように、アメリカの大学図書館における利用指導は共通の目標のもとに組織的に取り組まれている重要なテーマになっていることは確かである。

わが国でも、近年ようやく大学の図書館利用指導に関する研究調査が活況を呈するようになり、雑誌論文等も目につくようになった⁸⁾。その多くは、それぞれに示唆的であり、たとえ個別的事例として利用指導がとりあげられたものであっても、館界全体としての結集した世論を喚起する上に役立つものと考えられる。本稿もそのような意図をこめてまとめようとしたものである。

III. オリエンテーション

上述のアメリカの「大学図書館における文献利用指導の指針」はオリエンテーションにも言及している。したがって、本稿でも、まずオリエンテーションの問題からとりあげてみたい。

オリエンテーションでは図書館の施設およびサービスについて概括的知識が与えられれば十分であるが、それで図書館利用教育が終わるのではなく、これを手はじめに文献利用指導へと展開されるべきものである。他方、文献利用指導はオリエンテーションを経ていることを前提として行われる。つまり、両者は不可分な関係において、相互に補完するものとして捉えられる。

わが国におけるオリエンテーションの実態については比較的最近の私立大学図書館協会東地区部会の閲覧奉仕研究分科会による、アンケート調査が明らかにしている⁹⁾。これまでも幾度かこの種の調査が試みられたが、国・公・私立の大学をあわせて436大学の445館を調査対象とし、328大学335館からの回答に基づくこの調査のような規模のものがなかっただけに、貴重な成果であるといえよう。

これによれば、85.7%の館が何らかの新入生オリエンテーションを行なっていることが分かるが、学生数が1万人以上の大規模大学では実施率が低下(69.6%)している。また、その内容にもかなり差異がある。しかも、その大半が大学の一般オリエンテーションの一部として織り込まれていることを、実施時期、所要時間、企画者実施目的の面から伺い知ることができる。調査の報告者は、“学生の関心、疲労等を考慮し、堅苦しい、退屈な話を長く述べるのは避けるべきである。そして、開閉館

の日時、貸出冊数、貸出期限などは、なるべく印刷物で補うのがよいと思われる”⁸⁾ という考察を加えているがオリエンテーションの現状からみて、まさに妥当な意見であるといえよう。

大学教育と図書館利用は本来深いかかわりを持っているはずであるが、教育による図書館利用への動機づけは稀薄であり、学生が自発的な図書館利用の契機を見出すことはむずかしい。このような状況にあっては、まず最初の手がかりを図書館側から与えるために、たとえ負担は重くても、オリエンテーションと主体的に取り組む必要があろう。

実施以前の段階で、可能な方法のうち、いずれが有効か、図書館全体として十分な検討が必要なことはいうまでもない。広い意味の利用教育のなかでも、オリエンテーションは図書館の置かれている条件によって最も個別的性格が強くなるはずであるのに、意外に他の模倣が多く、オリエンテーションがお座りの年中行事化していることは現状での問題点である。

すでに述べたように、オリエンテーションは図書館利用教育の一環として行われるところに意味があるが、それ以外の積み重ねができない点がもう一つの問題である。医学図書館の場合のように、図書館員が文献に関する講義を分担している幾つかの例があるのはむしろ例外的であって、多くの場合、オリエンテーションを補完する利用指導が行われないために、オリエンテーションに期待をかけすぎるといった問題もある。学生は、建前上は、学校図書館で利用教育を受け、図書館利用の経験をもっているはずであるが、事実は大きく相違するために図書館側の期待は一方的なものになってしまう恐れがある。

IV. 文献利用指導

上述のような実情からみて、オリエンテーションとは別個に、何らかのかたちで文献利用指導が行われることは極めて望ましい。しかし、閲覧奉仕研究分科会では、この種のものをガイダンスとしてとらえているが、これを実施している館は335館のうち45館(13.4%)にすぎないことを明らかにしている⁹⁾。全体的にかなり低調であることが伺える。

もちろん、文献利用指導といっても、企画された形式のものだけでなく、レファレンス・サービスの一環として行われているものもある。このような個別的な利用指導も含めれば、かなり広範に行われているとみることが

できる。しかし、全般的な影響力という点では正規の科目において行われることが望ましい。それは特定の主題に関する科目において、教員との協力のかたちをとって部分的に文献利用指導を織り込む場合と、独立の科目として行う場合とに大別することができる。後者はさらに図書館利用法と個別の二次資料の利用法をどのようにウェイトづけをするかによって、さまざまな内容のものとなる。また、科目とはいっても、単位が与えられる正規のものだけでなく、インフォーマルに数回実施されるにすぎないものもある。

以下においては、筆者が実施した二つの大学における正規の独立科目としての文献利用指導について概要を紹介し、問題点を検討することにした。

A大学では、『図書館学』（2単位）を担当している。これはもともと学校図書館概論ともいうべき内容の講義であったが、筆者が昭和47年に担当して以来、学生の希望を入れながら年々内容を改め、過去数年は文献利用指導ともいうべき内容に変わっている。昭和54年度の概要を示せば、以下のとおりである。

1. 序 論

情報化社会と情報処理能力

学習・研究における大学図書館の役割

図書館の種類とその特徴

2. 文 献（情報）の収集

文献の生産と流通

一次・二次資料の種類とその特性

文献の選択・収集

3. 情報要求と図書館サービス

情報要求の型

閲覧サービス

参考調査サービス

4. 文献探索

文献探索の意義

文献探索の目的

文献探索の方法

5. 図書の探索

図書探索上の問題

閲覧目録とその利用（演習を含む）

館外図書の探索（演習を含む）

6. 雑誌の探索

雑誌探索上の問題

雑誌目録とその利用（演習を含む）

雑誌論文の探索（演習を含む）

7. 人物、機関情報の探索

人物情報探索上の問題

人物情報の探索（演習を含む）

機関情報の探索（演習を含む）

8. 地名関係情報の探索

地名関係情報探索上の問題

地名関係の情報源

地名情報の探索（演習を含む）

9. 二次資料の作成

文献目録等の作成手順

収録文献の採集と編成・配列（演習を含む）

図書館における分類・目録

10. レビューとテスト

これは毎週70分2コマ分連続で春学期に行われるが、5～9には演習が含まれるので、1～4のほぼ2倍の時間が配分される。なお、時間的に余裕がない時は、年度によって8が省略される。

受講生は文科系および理科系の専攻の3・4年次（若干の2年次）の学生であるために、特定の主題領域を限定せず、それぞれの専攻との関連において論文を作成する立場から文献利用をするように仕向けている。したがって、とくに方法の問題に重点をおいている。

また、文献探索をする際に不可欠な図書館に関する知識を身につけるために、図書館業務の解説も加えている。1では図書館の管理・運営、2では選書、発注・受入れ業務、3では貸出し方式、レファレンス・サービス、4～6では文献調査業務、7、8では参考質問の回答処理、9では書誌サービス、整理業務といった具合に、学生が個人の立場で情報処理をするのと対比し、図書館における問題をとりあげ、両者の関連を明らかにする。

なお、図書館業務については試行的に図書館の各責任者（4～5名）に依頼し、毎週30～70分程度、それぞれの担当部門について説明してもらうことにした。例えば館長からは図書館の管理運営について、総務の主幹からは発注、受入れについて、奉仕の主幹からは閲覧とレファレンスについて、整理の主幹からは分類・目録作業について、それぞれ業務を担当する側で考えている利用上の問題点をとりあげてもらうことにした。これは4年間続けられたが、具体的な事例が豊富なこともあって受講生のあいだでは好評であった。その後、館の人事移動等によって館員の協力が得難くなったこと、2単位の科目

では時間的に制約があること、などの理由により、一時こうしたかたちの協力を求めることは中止している。しかし、この方法の有効性は実証されたと考えられるので条件が整えば再度採用することにしたいと思っている。

次に、教授法の変化を紹介するために、この科目のこれまでの経過を略述したい。この大学では、私学としては珍しく、学生数を抑え、多くの小クラス制の科目を設けていることもあって、筆者が担当したこの科目も初年度にはわずか数名の受講生にすぎなかった。したがって大部分の時間は開架制の図書館の閲覧席で個人指導に当てられた。その後、年を追って受講希望者が増えたために、図書館のセミナー室（約40名収容）に必要な資料を持ち込んで講義を進めることになった。

やがて、セミナー室には収容しきれないほどの受講生の増加により、大きな教室を使用することになり、小クラス制の特色は完全に失われる結果となった。のみならず、正規に履修登録した受講生は百数十名であったが、単位とは無関係に聴講を希望する学生もふえたために、授業を進める上にさまざまな支障が生じてきた。

とりわけ、文献利用指導においては各種の書誌のツールを実際に示すとか、その代りに各種の視聴覚機器や教材を利用して現物について理解させる必要があるが、教室が広い関係で、これらの方法が有効でなくなったのは致命的であった。そこで止むを得ず、昭和53年度から図書館のセミナー室に収容可能な40名を限度として受講生を制限して現在に至っている。

他方、これとほぼ同様の科目をB大学でも担当した。B大学は大規模な国立大学であるが、担当した『文献探索法』は小クラス制をとる一般教育セミナーのの一つであり、1学期2単位である点はA大学の場合と共通する。ただし、受講生は一般教養課程の1・2年生である。

初年度はA大学の場合と同じ科目内容で開始したが、受講生の反応は極めて弱く、学期の途中から急ぎょ内容の再検討をせざるを得なくなった。その結果、図書館業務に関する解説は大幅に削減し、参考質問の事例を利用して、問題解決手法の説明に重点をおくことにした。こうして、ある程度、受講生の関心をつなぎ留めることはできたが、その後、隔年に開講した結果ともあわせて判断しても、決して満足すべき成果が得られたとはいえない。

V. 問題点——結びに代えて

A, B両大学において、ほぼ同一内容の科目を担当しその結果を比較評価した場合、受講生の反応に著しい差異があったのであるが、それは、どのような要因に基づくものであろうか。反省の意味をこめて、この点を整理することによって結びに代えたい。

第1に、受講生の問題意識の面に差が認められる。A大学では大多数が専攻の決まったのちの3・4年次の学生であり、卒業論文作成中の学生も含まれ、全体的に活発に質問する。これに対して、B大学の場合は教養課程の学生であり、半数近くは新入生である。したがって、科目名から幾分か興味を覚え、これを選択しただけのことであって、若干の例外はあるが、一般に問題意識はあいまいである。

第2に、教授法の問題がある。A大学では比較的図書館の利用を促す教授法を採用の教員が多いように見受けられる。学生の質問からもしばしばこうした点が伺える。これに対してB大学の教授法がどうであるかは一般論としてはいえないが、受講生に尋ねた限りでは図書館を利用する必要のある課題が与えられることは稀であるということであった。したがって、図書館に対する関心の度合は明らかに異なっている。

第3に、動機づけの問題がある。第2とも関連するがA大学では図書館のオリエンテーションのほか、論文作成の時間などが設けられており、十分ではないにしても科目の履修以前にある程度の動機づけがなされている。これに対して、B大学では図書館案内のパンフレットを配布する程度で、相対的に学生への働きかけは弱い。

第4に、当該大学の図書館の問題がある。A大学の図書館の規模はさほど大きくはないが、学部学生の学習上の必要にはほぼ応じうる蔵書を保有し、閲覧目録をはじめとして、種々の検索ツールはよく整備されている。したがって、科目に関する演習がやり易い。しかし、B大学では検索ツールが不備であり、学生も利用しにくいことをしばしば問題にしている。したがって、例えば原則的な探索法を教えても、それは実用的ではないという意見が出されるし、かといって、図書館の実態に照応した利用指導をしても応用範囲は狭いという難点がある。

第5に、科目担当者と図書館員との連携の問題がある。A大学では、講義、演習の準備段階のみならず、講義の分担を依頼しても積極的に協力してもらえたが、B

大学では、筆者自身が働きかけをしなかったために、この科目に関する連携協力は行われていない。

第6に、施設的な条件の違いがある。A大学では図書館の中にあるセミナー室が使用できるので、壁一つ隔ててレファレンス・コレクションが利用できる。上下の階には、それぞれ一般図書、雑誌コレクションが開架されている。B大学では普通の講義室を使用したために、毎回わずかなサンプル資料を持ち運び、それらを提示するのと、若干の資料を配布するだけである。したがって、A大学では、当該科目の時間の前後に余裕さえあれば、学生はその場で自由に予習、復習ができるが、B大学ではそうにするのは無理である。

第7に、A大学における経験からいえることであるが文献利用にかかわる教育は受講生がふえるにしたがって演習の要素を減らさざるを得ず、講義形式をとることになる。したがって、教育機器の活用を検討する必要がある。伝統的な教授法で内容を充実させるには、40名程度が上限ではなかろうか。講義科目では、どうしても単調になりがちであり、受講生も限られるので、多数の学生を対象としても、それなりの効果のある利用指導の方法をも合わせて採用する必要があるだろう。

以上、文献利用指導に関する正規の科目を担当した経験に基づいて問題点を提示したものの、この種の科目の必要性は回を重ねる度に強く感じられる。

しかも、担当者としては十分な書誌的知識をもつとともに、利用者の文献利用習性について理解している経験豊富な図書館員が最も適任であると考えられる。

したがって、こうした利用教育関係の科目を各大学において正規のものとして定着させるためには、アメリカにおいてみられるように、図書館関係者の力を結集し、利用教育のあり方を検討し、教員、学生に対しても十分説得力のある指針を策定する必要がある。さらに、そのような指針を支持する組織的な力を背景にすることによって、図書館利用教育は大学教育における不可欠な部分であると認められるよう、図書館側から積極的に大学当局ならびに教員に働きかける必要がある。常にいわれているように、図書館利用教育は図書館員と教員の連携がなされてはじめて有効なものとなるからである。

それは決して容易なことではないが、背景として既述したように、アメリカにおいてはすでに目的を達成した先例がみられ、不可能なことではないことを実証している。このように考えてくると、今後利用教育を発展させようとする上で、最も大きな障害となるのは図書館員の

意識の問題ではなかろうか。日常業務を大過なく消化してさえいさえればよいという意識では、利用教育についての傍観者とはなり得ても、正規の科目からオリエンテーションにわたるさまざまな局面における利用教育を分担する責任者とはなり得ないからである。

引用・参考文献

- 1) Towards Guidelines for Bibliographic Instruction in Academic Libraries, College and Research Libraries News, 36 (5) : 135-139+, 1975.
- 2) Guidelines for Bibliographic Instruction in Academic Libraries, College and Research Libraries News, 38 (4) : 92, 1977.
- 3) 次の議事要録は、いずれも Ann Arbor (Michigan) の Pierian Press から発行されている。
 - No. 1 : Library Orientation : Papers Presented at the First Annual Conference on Library Orientation held at Eastern Michigan University, May 7, 1971.
 - No. 2 : A Challenge for Academic Libraries ; How to Motivate Students to Use the Library : Paper Presented at the Second Annual Conference.....May 4-5, 1972.
 - No. 3 : Planning and Developing a Library Orientation Program : Proceedings of the Third Annual Conference.....May 3-4, 1973.
 - No. 4 : Evaluating Library Use Instruction : Papers Presented at the University of Denver Conference on the Evaluation of Library Use Instruction, December 13-14, 1973.
 - No. 5 : Academic Library Instruction; Objectives, Programs, and Faculty Involvement : Papers of the Fourth Annual ConferenceMay 9-11, 1974.
 - No. 6 : Faculty Involvement in Library Instruction ; Their Views on Participation in and Support of Academic Library Use Instruction : Papers and Summaries from the Fifth Annual Conference.....May 15-17, 1975.
 - No. 7 : Library Instruction in the Seventies ;

State of the Art : Papers Presented at the Sixth Annual Conference.....May 13—14, 1976.

- 4) Blum, Fred : Introduction *In* Library Instruction in the Seventies ; State of the Art. Ed. by H.B. Rader. Ann Arbor, Mich., Pierian Press, 1977. p. ix.
- 5) Fred Blum は “一般に Library Orientation という初期のことばに代り, Library Instruction ということばが用いられるようになった” (Ibid., p. x.) と述べている。
- 6) 1970年代に入ってから次ものがある。
吉本瑞応：医学教育と医学図書館員，大学図書館の管理運営—第2回日米大学図書館会議応募論文集 大学図書館国際連絡委員会，1972. p. 82—94.
北島武彦：大学における図書館の利用指導に関する一考察，大学図書館研究，3・4合併：14—17，1974
矢道 勉：医学図書館における利用者教育，医学図書館，23 (2)：79—86，1976.
深川恒喜等：大学生を対象とする図書館利用指導について，武蔵野女子大学紀要，11：29—36，1976.
および統論。
独協大学オリエンテーション企画班：大学図書館オ

リエンテーションの一試み，図書館雑誌，70(10)：415—419，1976.

図書館の利用指導＜特集＞，現代の図書館，16(3)：111—139，142—166，1978 米国大学図書館における利用指導活動の発展(ウィリアムス，みつ子)，大学図書館利用法講座 (外山良子)，大学における図書館の利用指導 (井出翁)。

渋谷雅俊：大学図書館利用者教育研究序説—「テキサス大学図書館利用者教育総合計画」を中心として Library and Information Science，16：235—251，1978.

私立大学図書館協会東地区部会研究部閲覧奉仕研究分科会：大学における新入生オリエンテーション及びガイダンスのあり方——全国大学図書館実態調査を中心にして，私立大学図書館協会会報，70：48—84，1978.

山里澄江：図書館利用への動機づけ——学科の教官・大学院生・学生を対象として，びぶろす，30(1)：286—295，1979.

- 7) 私立大学図書館協会東地区部会研究部閲覧奉仕研究分科会，*op. cit.*
- 8) *Ibid.*, p. 56.
- 9) *Ibid.*, p. 63.